


「出会う」ということ
—学生とコロナ禍社会を考える—

木越 康

大谷大学 学部学科構成

文学部	真宗学科・仏教学科・哲学科・ 歴史学科・文学科
社会学部	現代社会学科 コミュニティデザイン学科
教育学部	教育学科
国際学部	国際文化学科

文学部の学科と学び

真宗学科 (思想探究, 現代臨床, 国際)	
仏教学科 (仏教思想, 現代仏教)	
哲学科 (哲学・西洋思想, 心理学・人間関係学, 倫理学・公共哲学, 宗教学・死生学)	
歴史学科 (日本史, 世界史, 歴史ミュージアム, 京都探究)	
文学科 (日本文学, 現代文芸)	

社会学部の学科と学び

現代社会学科 (現代社会学 <公共社会・人間関係・現代文化>)
コミュニティデザイン学科 (地域政策学, 社会福祉学, 情報メディア*)
* 2022年4月開設予定
 

教育学部の学科と学び

教育学科 (初等教育, 幼児教育)



国際学部の学科と学び

国際文化学科

(英語コミュニケーション, 欧米文化, アジア文化)

GLOBAL SQUARE



フィールドラーニング



カナダ語学研修



社会学部 ディスカッション授業より

「コロナ禍社会を考える」

「よかった」と感じられる点

○テレワーク

自分で選んだ場所で作業をおこなえるため、移動にかけていた時間をカットすることができる。そのため、煩わしいさや早く起きるなどストレスを感じることなくすぐに仕事に取りかかることができる。…効率面だけで言えば良かったことだと考えた。

○趣味を見つけられたこと

外出することが制限されるようになり、家にいることが多くなったことから、さまざまなことに挑戦し、自分に合った趣味を見つけることができた。

○パソコンを触る機会が増えた事。

タイピングが早くなった。WordとかExcelは社会に出たら必要なので、そのアプリケーションを使えるようになった。他にはzoom等のオンライン会議もパソコンで出来るようになった。…貴重な体験となった。

○「オンライン授業で通学時間がカットされたことにより、時間に余裕ができた」「バイトに割く時間ができ、どこにも行けないからお金が貯まった」などの前向きな理由があった。また、メンバーのうち3人が犬や猫を飼っており、「ペットと戯れる時間ができた」と、ほっこりする理由もあった。

○時間に余裕が生まれた

オンライン授業の実施によって、通学時間が無くなり時間に余裕が生まれるようになった。時間に余裕が生まれたため、十分な睡眠時間の確保や趣味に充てる時間が長くなり私生活の充実に繋がった。

最も多かった意見：「よかった」点

○以前は帰宅時間がバラバラだったので、それぞれ好きなタイミングで夕食をとっていたが、コロナ禍の今はほとんど同じ時間に帰宅するので、一緒にご飯を食べるようになった。

○以前は、家族の健康を意識しなかったが、コロナ禍の今は家族の健康を意識するようになった。…家族で過ごす時間が増え、よく会話するようになった。

○以前は両親ともに共働きで家にいる時間が少なかったが、コロナ禍の今は在宅ワークになり会う機会が増えた。以前は家の手伝いをあまり少なかったが、コロナ禍の今はよく家の手伝いをするようになった。以前は家族での会話が少なかったが、コロナ禍の今は会話する回数が増えた。

○コロナ前は、家事はほとんど母親がやっていたがコロナで家にいることが多くなったのでみんな分担してするようになった。

○コロナ前では友達と出かけたりアルバイトをしたりで家にいる時間が少なかったが、コロナになってから家にいる時間が増えて家族と過ごす大切な時間が増えた。

「家族」がむしろ問題となったケース

○以前は毎日ずっと家にいることはなかったので兄弟喧嘩は少なかったがコロナ禍の今はみんなストレスがたまってよく喧嘩をするようになった。

○以前は普通であった父との仲が、コロナ禍の今は喧嘩が増えるようになった。以前は家を出る時親に、携帯持った～？と聞かれていたが、コロナ禍の今はマスク持った～？と聞かれるようになった。

○以前平日の家の中はガラガラだったのに、家族みんなで集まることで気疲れするようになった。

○友達関係においてはステイホームやオンライン授業の影響により物理的な距離が空いた。また、人と距離を取るようになったため仲を深めるためにかかる時間が長くなり、心理的な距離も空いた。一方で、家族関係においてはステイホームやテレワークの影響を受けコロナ以前よりも距離が近くなりストレスの原因になった。

「一人暮らし」「下宿生」の場合

○コロナ禍以前は、長い休みがあるごとに実家にかえっていたけど、コロナ禍以後はコロナを気にして実家に帰れなかったりしたので、家族とのコミュニケーションがあまり取れなくなりました。

○以前は帰省する回数を年6回にしようと思ったが、コロナ以降では、年3回にすることに決めた。

○まず、以前に比べて県をまたいだ移動が規制されているため、実家に帰省しづらくなった。また、コロナがなかったら早くからバイトをする予定だったけど、バイトも見つからなくて、お金の面で家族には迷惑をかけてしまった。

○以前は毎週のように祖父母の家に遊びにいっていたが、コロナ禍の今はそれができず祖父母や親戚と1年以上会えていない。

アフターコロナを考える

《キーワード》

- ・つながり
- ・感謝と思いやり
- ・争いと差別
- ・アフターコロナへの提言



清沢満之：「万物一体」の思索

キーワード①；<つながり>を感じる

○世界規模で見直すべきこととして、他国で起こっている問題を自国には関係ないものとして捉えてしまったことを挙げる。今回のコロナ流行においてコロナ流行は中国だけの問題と捉えたことで世界各国に感染が広がった。そのためある時点では自国に関係が無くとも関係あることとして捉え広く情報共有することが必要であると考え。

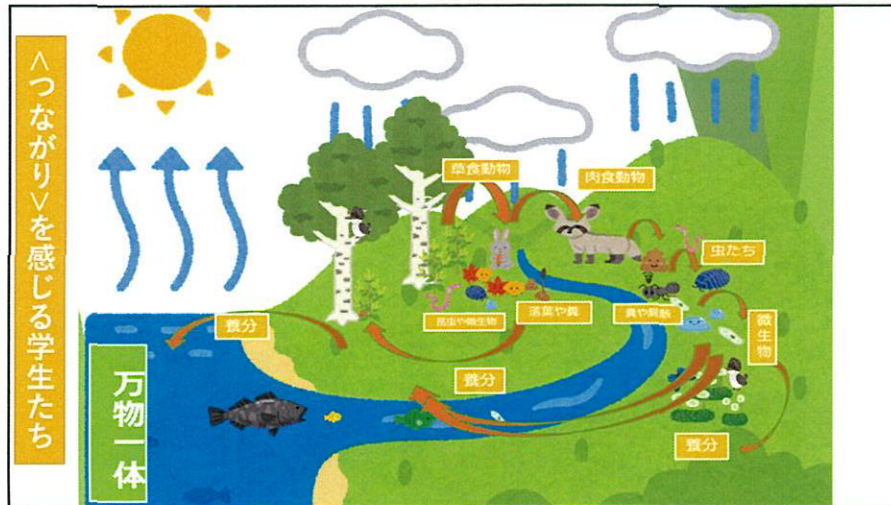
○私たちは対応が後手に回ることにより最初よりも大きな問題を引き起こしている…中略…コロナのような緊急事態に対しすぐに対応をし、そして人と人との関係性を重要視するべきであると私は考える。これを大切にすることによって私たちの社会は進化しよりよい社会になると私は思う。

○見直すべき点は各国の対応と国同士の連携だと考える。…中略…これからは、感染症などが起きたらまずはWHOへの報告や感染症に限らず各国に情報を共有することなど、より国同士が密に連携を取り合う必要があると考える。

清沢満之 万物一体

万物一体の真理は、宇宙全体に存在するあらゆる物体は、決してそれぞれが個々別々に独立して在るのではなく、すべてが互いに影響を与え、支え合いながら、全体で一つの組織体として成立していることを表す。この真理の思索上重要である点はさておき、今は少しこの真理の<実践>に関する側面を述べる。万物一体の真理は、人間がそれぞれに認識や自覚することがなくても、常に私たちの上にはたらいている。…中略… 一個の存在からすれば、他の万物はみなその一存在に属するものである。釈尊はこれを『法華経』で「世界はすべてが己である」と説き、また特に他の生命に対する慈悲の心から「あらゆる生命はことごとくわが子である」と教えた。

今此三界 皆是我有 其中衆生 悉是吾子（『法華経』譬喩品）より



キーワード②；<感謝と思いやり>

さて、私たちの心の姿の最もありのままを映すのは、財産と子孫であろう。しかし釈尊が説くように、今や万物天地がわが財であり、すべての生命はわが子である。だからすべての事物と生命を尊重し愛することを拒んでも、それは許されない。私たちは万物を尊重し、決して傷つけ害してはならない。すべての生命を愛し尊んで、苦しめ悩ませてはならない。公共徳なるものはここに誕生し、救済のための(宗教的)教法も、ここにはじまる。(Kiyozawa)

○社会全体から求められる行動と違うことをする人や、それに意を唱える人に対して批判が集まり易い。自分が、ではなく相手への思いやりを個人のレベルだけでなく全体として持って行動する事が求められる。

○この厳しいコロナ禍を乗り越えるためには、人と人との協力が必要不可欠だ。…中略…最前線で闘う医療従事者をはじめ、感染症対応に尽力されている多くの人々に対し、感謝の気持ちを忘れないこと、そして自分本位な考え方をするのではなく、他者を思いやる心を持ち続けることがこれから先も私たちの社会には重要であると考え。

人は言うであろう、『これは聖人・賢者の言うことであり、立派な人格者の行為であって、私たち凡庸な人間に当てはまるものではない』と。その通り。これはブッダの見地に立つものであり、ブッダのみが実行し得ることである。私たちは容易にこれを企て、実現できるものではない。しかしそうは言っても、『これは到底私たちが努力し、その到達を目指すべきものではない』と言うべきではない。なぜなら、根拠となる万物一体の真理は決して私たちに離れないからである。(Kiyozawa)

私たちは到底、すべての存在を私自身が生み出したものであると受け止め、すべての生命をわが子のように愛することはできない。(同上)

私たちは到底、すべての存在を私自身が生み出したものであると受け止め、すべての生命をわが子のように愛することはできない

が、そのような感覚を持ちながらも、社会的な道徳の必要性を言われればその通りであると思ひ、誰かが救済を得たという良い知らせを聞けば感謝の念を懐く。それによって私たちの心の奥底に、道徳心や宗教心の本性がないわけではないと知ることができる。すでにこの本性があるならば、私たちはこれを養い育て、光り輝く美しい華を咲かせなければならない。(Kiyozawa)

見よ、私たちが道徳や宗教の訓告や誠めを聞きながら、これを敬いたがうことができない時、私たちは心の内にある種の不可思議な苦痛や愛いの感覚をもつであろう。それがいわば良心の苦痛や罪悪の感覚である。これこそが私たちの心の奥底から沸き起こってくる、最も深い苦痛である。これは私たちの本性が抑圧され、本来の正当なはたらきを成すことができないためにおこる心の反抗である。その苦痛が激しければ激しいほど、それは反抗心が盛んであることを意味するのであり、本性の作用がようやく殻を破って自由な世界に生まれる徴である。(同上)

キーワード③；<争いと差別>

ハンセン病が流行していた時と同じような差別的なことがこのコロナ禍でも起きており、「病院で働いている人の子は学校に来るな」などと言われていたことや、コロナ患者の隔離や、自粛警察などがあり、人を差別するようなことが起きてしまっていた。これらを見直し、これからはメディアの情報には正しい情報とそうでない情報がある事を知り、見分ける力をつけ、正しい方を選び、同じ過ちを二度も繰り返さないように、差別的な行動をとらないようにしなければいけない。

未知のウイルスへの不安から、生活用品の買占め、転売、自粛の無視、デマの拡散、不安を煽るメディア、誰かの差別や排除など、人の嫌な部分が露わになった。私たちはコロナの影響によって直接人と関わる機会を奪われたが、誰かとの繋がりを完全に失ったわけではない。人と繋がりを持って生きている以上、自分の身勝手な行動や無責任さが誰かを苦しめることを理解しなければならない。

キーワード④；アフターコロナへの提言

コロナ禍社会になり皆が厳しい状態になったときに、これまではそのストレスなどを差別や争いを起こすことで解消していた。しかし、そうすることでは何も解決することはできないし、むしろ状況を悪化させてしまう。厳しいときにこそ助け合い協力することが大切であり、解決に早く近づくことができる。そのため、ストレスを差別や争いに向けていたのを見直し、これからはそのストレスと上手く付き合い、個人を尊重し他人と協力するべきである。

ハンセン病が流行していた時と同じような差別的なことがこのコロナ禍でも起きており、「病院で働いている人の子は学校に来るな」などと言われていたことや、コロナ患者の隔離や、自粛警察などがあり、人を差別するようなことが起きてしまっていた。…中略…正しい情報とそうでない情報がある事を知り、見分ける力をつけ、正しい方を選び、同じ過ちを二度も繰り返さないように、差別的な行動をとらないようにしなければいけない。

万物一体の <実践>に関する側面

私たちの心の奥底に、道徳心や宗教心の本性がないわけではないと知ることができる。すでにこの本性があるならば、私たちはこれを養い育て、光り輝く美しい華を咲かせなければならない。(清沢満之)

☆良心の苦痛や罪悪の感覚
☆心の奥底から沸き起こってくる最も深い苦痛

人性の至奥より発する至深の苦痛

キーワード④；アフターコロナへの提言

コロナ禍社会になり皆が厳しい状態になったときに、これまではそのストレスなどを差別や争いを起こすことで解消していた。しかし、そうすることでは何も解決することはできないし、むしろ状況を悪化させてしまう。厳しいときにこそ助け合い協力することが大切であり、解決に早く近づくことができる。そのため、ストレスを差別や争いに向けていたのを見直し、これからはそのストレスと上手く付き合い、個人を尊重し他人と協力するべきである。

ハンセン病が流行していた時と同じような差別的なことがこのコロナ禍でも起きており、「病院で働いている人の子は学校に来るな」などと言われていたことや、コロナ患者の隔離や、自粛警察などがあり、人を差別するようなことが起きてしまっていた。…中略…正しい情報とそうでない情報がある事を知り、見分ける力をつけ、正しい方を選び、同じ過ちを二度も繰り返さないように、差別的な行動をとらないようにしなければいけない。

真面目な学生の怒り ?

コロナ禍となり浮き彫りとなったのが、日本という国の優先順位がお年寄り優先ということ。確かに老人がコロナウイルスに感染するとかなり危険な状態になるということは分かるが、最近のニュースを見てわかるように学生や若者は修学旅行や外食、友人との遊びを制限されているが、老人はそんなことも無く、「健康のために体を動かしたい」といった理由からゴルフやボウリングに打ち込んでいる。このような結果から日本という国の政治に、**若者が意欲的に介入**していく必要があると考えた。

「出会う」ということ
—学生とコロナ禍社会を考える—

ご視聴、ありがとうございました。